田村市立都路中学校
学校だより 第１７号

令和７年７月１７日（木）
発行責任者：校長　佐藤　仁
TEL：0247-75-2009

めざす生徒像：自らの志を語り、目標に向かって主体的に努力できる生徒
めざす学校像：志を育む学校　　学び合い、高め合う学校　　信頼され、愛される学校

終戦80年に思うこと③

人類史上、原子爆弾が使用されたのは太平洋戦争時、日本に対してのみです。

１９４５年８月６日午前８時１５分、広島市へ投下されました。同年１２月末までの段階で約１４万人が犠牲になりました。広島に続いて８月９日午前１１時０２分、長崎市に再び原子爆弾が投下され、７３、０００人もの人々が命を落としました。その後も様々な関係機関が原爆による死者数を調査していますが、正確にはわかっていません。

「無差別大量殺戮兵器である原子爆弾の開発・実戦での使用が太平洋戦争を終戦へと導いた。原子爆弾を使用していなければ戦争が継続しさらに多くの犠牲者が出た」と、原子爆弾の使用を肯定する考えをもつ人がいます。その一方で、戦争に全く関係のない民間人を標的にした原子爆弾の投下は、戦時国際法違反であり認められないと否定的な意見をもつ人もいます。当事国であるアメリカにおいても賛否が別れており、世代が上がるにつれて原爆投下を肯定的に評価する人が多いです。若い世代は、民間人をターゲットにしたことやその犠牲者の数から原爆投下に否定的な考えをもつ人が増加傾向にあるそうです。

１９６３年国際連合において、核兵器廃絶を目的に「核拡散防止条約」が採択されました。核兵器廃絶を目的にしながらも、第二次世界大戦戦勝国であるアメリカ、ロシア、イギリス、中国、フランスの五カ国は核保有国として核兵器の保持を認められています。それ以外の国は、非核保有国として核兵器を保持することはできません。太平洋戦争末期の広島市や長崎市での残酷で悲惨な現実を教訓とせず、自国の安全保障や戦争の抑止力として核兵器の保持を肯定する国があること、さも核兵器が世界の国々の微妙な関係性、距離感の保持や平和に貢献しているというように、核兵器保持を前向きにとらえている人がいることに違和感を通り越して嫌悪感に近い感情を抱きます。

世界的な核兵器廃絶への潮流の中で、唯一の被爆国である日本ができることは何でしょうか。日本だからできること、しなければならないことは何でしょうか。

核兵器廃絶に向けた取り組みについて、政治レベルと民間レベルで違いはあります。民間レベルでできることとして、戦後８０年が経過して戦争を知らない世代が圧倒的に増え記憶の風化が危惧されている現状をふまえ、まずは事実を知ることから始めたいと思います。

８０年前の日本や世界で何があったのか。太平洋戦争が勃発したのはなぜか。なぜ、日本人は民間人含めて３１０万人もの人々が犠牲になったのか。太平洋戦争を人類の負の遺産といって片付けるのは簡単です。しかし、人的、物的、そして心的にも多くの犠牲を生んだ戦争から得たことを教訓に、事実を知ろうとする姿勢を失ったら記憶の風化がさらに進み、８０年前の戦争よりさらに悲惨な結果をもたらす戦争が起こり得るように思います。

現在世界には、１２、２４１（２０２５年１月現在）の核兵器があります。「核拡散防止条約」に１９６３年当時加盟した５カ国以外にも、インドやパキスタン、北朝鮮、イスラエルが核兵器を保有していると言われています。現在、広島市や長崎市を破壊した原子爆弾の２４倍の破壊力を備えた核兵器が開発されています。それが１２、０００以上世界にあるわけです。前述したように、核兵器保有国同士が互いに牽制し合い微妙なバランスの上にあるのが現在の国際社会です。そのバランスが崩れた時のことを考えると心の底から戦慄を感じます。

知らないこと、知ろうとしないことは、歴史に背を向けること、繰り返してはならない悲劇が再び起こる原因になると思います。無関心が最大の問題です。人類史上初めて原爆を投下され、辛酸をなめざるを得なかった先人達の平和を願う思いに応えるためにも、事実を知ること、知ろうとする姿勢を大切にしたいと思います。歴史を知ることは日本人としてのアイデンティの確立に必要不可欠です。太平洋戦争という歴史を、どう受け止め、どう消化し、そして平和な世界の実現のためにできることは何かを考えることが、８０年前に原爆を投下され敗戦国となった歴史をもつ日本人に課せられた義務のように思えてなりません。

「ノーモア・ヒロシマ、ノーモア・ナガサキ」という核兵器（核戦争）のない平和な世界をのぞむ代名詞のようなフレーズがあります。「広島や長崎のような核兵器による悲劇を繰り返してはならない」という意味です。５年後、１０年後、世界の核兵器保有数はどうなっているのか。平和な日本、平和な世界のために、自国の歴史と合わせて、他の国との関係についても知ること、知ろうとする姿勢を大切にしたいと思います。